

pen

with New Attitude

6/15
2002 No.85
500
yen

5
pen 5周年
ANNIVERSARY

男のデスク

書斎はないけど、デスクは欲しい



'02年バーゼル・フェア&ジュネーブ・サロン速報
ことし注目の腕時計、これに決めた!

北欧デザインに狂って、 最終結論はリプスドルフの机。

真ん中は壁に射し込む、いかに手を動かさずしてリビングルーム。



スウェーデン人デザイナー、ジョン・カンデルの「ピラスパー」は、雑誌を壁に積み重ねる本棚。



マティアス・スベリャの抽象画の下には、黒のヤコブセンのセブンチェアをスタッキング。



玄関口の天井には、ヴァーナー・パントンのムーランランプ。アンドリューが大好きなランプだ。



ボエ・モーエンセンのダイニングテーブルにヤコブセンの椅子。照明器具はインゴ・マウラー。

コレクターの癖は足の踏み場がなくなるほどモノが増えていくことだ。

エジンバラに住んでいた頃から、名作の北欧家具コレクターだったアンドリュー・ダンカンソンも、同じ癖みを憶えていた。椅子、テーブル、ランプ……気に入ったものを集めるうちに、家の中は家具で埋め尽くされた。

さて、どうするか。アンドリューが出した答えは「エジンバラからストックホルムへ飛び」大冒険だった。

1995年にストックホルムへ移り住み、3年後には趣味と実益を兼ねたアンティークショップ「モタニティ」をオープン。以来、北欧家具の愛好者たちから絶大な支持を得ている。

あまりに高価なデスクは、 気を使って何もできない。

6カ月前に引っ越したばかりのアパートはきれいに整理されている。

「アパートには好きな家具だけをセレクトして置いている」と語るアンドリューのデスクは、アルネ・ヤコブセンと一緒に仕事をしてきたデザイナー、リプスドルフ作のもの。フロリングの床に木製のデスクがよく映える。

右側に引き出しのついたオーソドックスなデスクは、奥行きはさほどないが、液晶ディスプレイを置くなど、限ら

れたスペースを有効に活用している。

アンドリューがアパートの仕事部屋で過ごし、窓際に置かれたデスクと対面する時間は、ほとんど夜だ。というのも、昨年度「モタニティ」のウェブページ（www.motantiti.com）は、アメリカの経済誌「フォーブス」のベスト・オブ・ザ・ウェブ賞を獲得。反響は大きく、インターネット・ビジネスも地味にアメリカはもちろん、日本からもメールが届くようになり、メールの受信を夜にまとめて行っているのだ。

以前はボエ・モーエンセンのデスクを使っていたが、売ってしまった。「あまりにも高価だから、傷がつかないように、なんて気を使っていたら何とかならない。正直言って壊れたんだ。」アンドリューが普段使うデスクによる条件は、機能的で気持に使えると。それだけだ。使い古すことにより、デスクに味わいが出てくる。

仕事部屋の床には、裸電球に突がいたインゴ・マウラーのランプ。壁には、雑誌を壁に積み重ねる本棚。ランプといい、本棚といい、ユニークなアイテムが、シンブルなデスクの周りで波紋を起している。

「美しく散らかったスペース」を、満たしたアンドリューには、満足感も笑顔があった。



●1968年グラスゴー生まれ。7年前ストックホルムへ移住。旧市街ガムラ・スタンで北欧モダンデザインのアンティークショップ「モタニティ」を経営。北欧デザインを愛するスコットランド人。